

論文

象徴天皇制の磁場に生まれた“夢の空間” ——中央児童厚生施設「こどもの国」の設立過程から——

金子 淳*

はじめに

こどもの国は、現在の横浜市青葉区と町田市にまたがる多摩丘陵の広大な敷地に立地する厚生労働省所管の児童厚生施設である⁽¹⁾。1965年5月5日に国営の施設として開園し、特殊法人こどもの国協会が運営した後、現在は社会福祉法人こどもの国協会が運営している。

一般には遊園地やアミューズメント施設としてイメージされることが多いが、児童館や児童公園と同じく、制度上はあくまでも児童福祉法第40条に基づく児童厚生施設という位置づけであるため⁽²⁾、民間の遊園地とは性質が大きく異なる。そのため園内には、観覧車やジェットコースターなどの大型のアトラクションは存在しない。自然の中での遊びや体験が重視され、自然の地形を利用した散策路やサイクリングコース、つり橋、芝生広場、湖、アスレチック、こども動物園などが設置されている。実態としては、民間の遊園地よりも、むしろ森林公園や自然公園に近いだろう。

こどもの国の特殊性は、児童厚生施設という制度的な位置づけだけでなく、皇太子（現天皇）の結婚記念をその出自とする設立の経緯にも起因する。実は、この皇太子結婚という大義名分が存在することにより、通常の公園とは際立った違いを見せている。園内には、皇太子記念館と呼ばれる建物があり(写真1)、「天皇陛下御在位〇〇周年植樹」という札を立てられた木が随所に立っていたりするなど(写真2)、天皇制を連想させる物件が目につく。こうした痕跡だけでなく、後に詳述するように、天皇制との関連はこどもの国のありよう自体をも規定していた。

さらに、こどもの国の敷地は戦時中に陸軍の弾薬製造貯蔵施設として利用され、戦後も米軍に接収されて田奈弾薬庫として使われていた土地でもあった。現在でも園内各所に弾薬庫をはじめとする痕跡が残されていることから(写真3・4)、戦争遺跡の見学コースの定番として知られた存在でもある⁽³⁾。

こどもの国設立の経緯は、このような象徴天皇制をはじめ米軍の占領政策および戦後処理の問題といった、戦後日本が抱えていた政治的イシューを色濃く投影したものであり、政府が自



(写真1) 皇太子記念館 (2009年1月撮影)



(写真2) 「天皇陛下御在位10周年記念植樹」 (2009年1月撮影)



(写真3) 園内に残る弾薬庫跡 (2009年1月撮影)

* 静岡大学生涯学習教育研究センター准教授

らこの計画に乗り出して推進していたことから見ても、政治の舞台としてきわめて重要な意味を持っていた。しかも、こどもの国の建設は、厚生省と朝日新聞社が一丸となって進められたことから、メディアと一体的な天皇報道のあり方という問題を浮き彫りにすることになったほか、その後の都市計画や公園行政、さらに児童厚生施設整備といった児童福祉政策のあり方にも影響を与え、単に特定の遊園地や公園の創設という問題の位相にとどまらない、多様な意味を含んでいた。

しかし、こどもの国に関しては、その設立の経緯の特殊さにかかわらず、含まれる問題があまりにも多岐にわたるためか、各論的に触れられることはあっても、その社会的な意味を射程に入れて論じられた研究は皆無である⁽⁴⁾。

本稿では、皇太子結婚という皇室慶事を出自とする、いわば象徴天皇制の磁場に引き寄せられたさまざまなアクターの行動によって、子どもの夢を創出するための舞台装置が築かれていった点に注目し、どのような主体がいかなる理由で引き寄せられ、どのような舞台装置を形づくっていったのかを考えてみたい。



(写真4) 高射砲陣地跡 (2009年1月撮影)

1 こどもの国への着想と米軍基地返還問題

(1) 皇太子発言の波紋

こどもの国は、冒頭で触れたように、皇太子の結婚をその母体とし、その祝賀ムードの中から生まれている。1958年11月27日に皇太子の婚約が発表されると、いわゆる「ミッチー・ブーム」が巻き起こる。国中がこのブームに沸く中で、結婚祝いの金品が続々と宮内庁に寄せられ始め、宮内庁は、この受け入れに対して苦慮するようになっていた。

1959年3月24日には、朝日新聞紙上において「お祝いをしていただくことはほんとうにありがたい。しかしお祝いの品はいただかなくとも結構だから、なんとかそういう気持ちを寄せ合って、子供のための施設でもできたら…」という皇太子の談話を発表する。「皇太子さまと正田美智子さんのご結婚まであと二十日たらず、お祝いの品の受付もはじまって、慶祝気分は次第に高まってきたが、いまお二人が静かに考えておられることがある」という一文から始まるこの記事には、お祝い品の使途に関して思案しているようすが伝えられている。2人が話し合った結果、「お祝い品を贈って下さるなら、まとまった予算のないためにできないような社会福祉事業の基金にでもあてていただけないものだろうか」と考え、身体不自由児施設や原爆被災者対策施設、小児総合病院などが候補に挙がった末、「子供のためになる施設」という意見でまとまったという(『朝日新聞』1959年3月24日)。

これを境に、お祝いの金品の送り先が、宮内庁から児童福祉を所管する厚生省に移る。この記事を書いた朝日新聞社記者(当時)の伊藤牧夫の回想によれば、この記事は周到に仕組まれたものだったという。事前に2人の意向をキャッチした伊藤は、厚生省児童局と協力し、「子供のための施設」に関する調査を内々に始めていた。しかもその調査結果は皇太子夫妻にも随時伝えられていた(池田 1996: 10-11)。

しかし、皇太子の教育役であり成婚に尽力したといわれる宮内庁東宮職参与の小泉信三は、この計画を公表することには懐疑的であったようだ。宮内庁が事業に直接乗り出し、もしうまくいかなかったりすれば批判の矛先が皇室にも向くことになることを憂慮していたからだろう。上記の新聞記事には、「趣旨としては非常に結構なことだが、はたして実行できるかどうか、いろいろ人の意見を聞いてみなければならない」という小泉の談話が載っていることから、宮内庁の慎重な態度が窺える。だが、このような宮内庁の態度を軟化させるためにも、あえて談話の発表に踏み切り、世論に訴えるという手段に出たと考えられる。この記事をきっかけにして、なし崩し的に「子供のための施設」建設に向けて事態が進行していく。

続々と寄せられる個人的な寄付金のほか、組織的な募金としては、全国地域婦人団体連絡協議会が「ご結婚記念児童施設基金」の取りまとめを始めた。さらに新生活運動協会、全国公民館連絡協議会、農協婦人団体連絡協議会、日本経営者団体連盟、経済団体連合会など、11団体がそれぞれの組織を通じて募金を始め、新生活運動協会を事務

局として「皇太子殿下ご結婚記念の会」を結成して募金を一本化した。こうして、1960年1月には1,260万円が集まったという（池田 1996：13）。

だが、「子供のための施設」といってもその範囲は広いと、どのような施設を作るべきか、厚生省では対応に腐心していた。坂田厚生大臣は、皇太子の発言を受けて、1959年4月13日の記者会見で「子供だけを療養させる病院」の構想を語り、あわせて、1ヶ所で1億5,000万円かかる施設を全国に数ヶ所作り、フィンランドのヘルシンキにある「子供の城」という病院をモデルにしたい旨も明らかにしている（『朝日新聞』1959年4月14日）。

その一方で、厚生省児童局では現実的なプランを模索していたが、このことについて当時厚生省児童局長の職にあった大山正は、後年に次のように記している（大山 1985：3）。

昭和34年の暮に翌年度の予算編成が行われた際、その最終段階において当時の岸首相が青少年対策予算として10億円の別枠を保留しており、各省に適当なアイデアがあれば提出するよとのことであった。安田次官、牛丸審議官からの話を受けて児童局では早速関係者が集って何か名案がないかと協議したところ、いろいろの案が出て甲論乙駁の結果、大自然の中で子どもが自由に遊びまわられる施設をつくろうという構想が浮かび、その名称を「こどもの国」とすること、そしてこれに何らかの形で先程のご成婚のお祝い金を役立てるのが最もよいということになった。徹夜の予算折衝が続いていたときのこととて、この成案が得られた時には私も局長室のベツ（ママ）トに横になり乍ら興奮の余り眠れないままに、この構想についてあれやこれやと思いつくしたのであった。

ここで初めて「こどもの国」の具体的な提案が示されることになる。首相が予算の別枠を持って各省に配分することは異例だったが、厚生省では1億円の予算要求をし、結果的に7,000万円の予算がつくことになったという。この財政的裏づけによって厚生省での施設作りが本格的にスタートすることになるのである。

1960年1月、厚生省児童局では、さっそく「仮称・子供の国設置案」をまとめている（池田 1996：34）⁽⁵⁾。先の大川の回想では予算要求をしたのが1959年暮れのことであったから、きわめて短期間に厚生省内部でまとめあげたことが分かる。この構想では、建設すべき施設として、「子供の家」（ホール、映写室、展示室、管理事務所）、「遊具設備」（固定遊具、運動場）、「休憩所、プール」などが例示され、それらの予算が6,400万円、ほかに建設事務費600万円の合計7,000万円であった。さらに、民間寄付5億円を集め、1960年度から63年度までの4年間に、文化館（遊戯室、ホール）、自然科学館（模型を含む）、児童図書館（図書、フィルムなど）、おとぎの国、動物の国、冒険の国（造園、模型含む）、のりものの国、世界の庭、産業館、社会館、宇宙館、未来館など、博覧会と見紛うほどの多彩な施設が構想されていた。

この厚生省の構想は新聞にも取り上げられ、「日本版ディズニーランド 子供に楽しい夢を 厚生省、今秋にも店開き」と題して報じられている（『朝日新聞（夕刊）』1960年4月22日）。この記事ではさらに具体的に「全施設を一時に完成することはとても望めないため、三十五年度約二億円、三十六年度一億五千万円、三十七年度一億円、三十八年度五千万円といったように、数年がかりで建設することになる」と伝える一方、その予定地にも言及しており、「同省が最も有力な候補地としているのは、近く払い下げられる埼玉県北足立郡朝霞町の旧米軍基地キャンプ・ドレイク（三十余万平方キロメートル）で、目下米軍、大蔵省、防衛庁の三者に対して交渉が進められている」と、米軍朝霞キャンプへの決定を示唆していた。

（2）米軍田奈弾薬庫の返還交渉

ところが、この候補地の選定は、意外な方向に進んでいく。厚生省では、「子供の国」の具体案を決めるため、1960年4月28日に厚生大臣の諮問機関である中央児童福祉審議会の中に中央児童厚生施設特別委員会を設け、19人の委員を任命していた⁽⁶⁾。実質的には、この委員会で候補地の選定作業を進めていた。

もともと皇居内東部地区、代官町一帯、ワシントンハイツ、十条兵器廠跡などが検討され、その候補は二十数ヶ所にのぼっていたようだが（『田奈の郷土誌』編集委員会 1964：64）、有力候補として米軍朝霞キャンプと藤沢市辻堂の米海軍演習地の二箇所絞られていた。しかし、結果的には神奈川県横浜市港北区奈良町と東京都町田市にまたがる米軍田奈弾薬庫に決定する。その背景には、地元横浜市からの熱心な要請があった。朝霞キャンプに決定する直前、

まったくのノーマークだった田奈弾薬庫の存在の情報が横浜市からもたらされ、その立地条件や環境が他の二箇所よりも抜き出ていたため、土壌場でくつがえることになったのだ(池田 1996: 39-40)。

田奈弾薬庫は1960年3月31日をもって閉鎖されており、4月初旬には米軍による弾薬の運び出しも済んで、ほとんど使用されることがなくなっていた。閉鎖の報に接した地元・横浜市港北区奈良町では、1960年2月10日に町民大会を開き、「駐留軍田奈基地閉鎖に伴う陳情書」を採択して県や市に対しその早期返還を要望していた(『田奈の郷土誌』編集委員会 1964: 61-62)。さらに、米軍の接収地を多く抱えていた横浜市にとって、接収解除は重要な政策課題でもあった⁽⁷⁾。このような背景から、横浜市も国の力を借りて接収解除を促進したいという目論見があったと考えられる。

候補地を探していた中央児童厚生施設特別委員会では、田奈弾薬庫が有利な点として以下のことを挙げていた⁽⁸⁾。

- ①低い丘陵の多い特殊な地形であり、将来周辺一帯が市街化されても、比較的良好な自然環境を保ちやすい。
- ②敷地全体が樹木で覆われ、子どもたちを豊かな緑の中で遊ばせることができる。
- ③良質の井戸水があり、米軍はこれを飲料水に利用している。さらに掘削すれば豊富な水量が期待できる。
- ④長津田駅から軍用の引き込み線があり利用できる。

数回の現地視察を経て、1960年8月8日に中央児童厚生施設特別委員会の席上で正式に決定した後、米軍との返還交渉に入ったが、これが難航をきわめた。返還交渉は、1960年1月19日に締結され同年6月23日に発効した日米安保条約に基づく地位協定により、日米合同委員会の補助機関である施設特別委員会において協議されることになり、日本政府は、1960年11月1日に開かれた施設特別委員会において田奈弾薬庫の返還を正式に要求している。ところが、同年12月9日に示された米軍側の回答は次のようなものだった。

田奈弾薬庫の返還要求について

- 一 米国政府は、日本政府ならびに関係地方公共団体が、東京一神奈川地区に児童厚生施設を建設しようという要望にたいし十分の理解と好意を有するものである。
また、米国政府は、田奈弾薬庫において、弾薬貯蔵の業務をおこなっていないことも承知している。
このような状態から、すなわち、何の活動も貯蔵もないところから、この施設が米国政府にとって余分なものであるという認識をえられたものと拝察する。
しかしながら、米国政府は、当分の間、田奈弾薬庫の保持を要求する。
- 二 以上の見地から、いかながら、米国政府は田奈弾薬庫の返還について、この時期において、考慮の余地のないことを日本政府に表明せざるをえない。

米国施設特別委員長 J.C. スパングレー大佐

この回答は、日本側の関係者を困惑させ、いったんは計画が頓挫することになる。建設を審議する中央児童福祉審議会中央児童厚生施設特別委員会の開催も中断する。ところが、そのような中で特別委員会の委員長・久留島秀三郎と米軍側の最高責任者であるロバート・W.バーンズ中将との会談が行われることになった。

久留島秀三郎は、同和鉱業の社長を務める財界人であったが、慣習や意識の改善を目指す官製団体である新生活運動協会の会長を務めるなど、多くの団体の会長も兼務していた。先に触れたように、皇太子結婚の祝い金寄付の窓口となる「皇太子殿下ご結婚記念の会」の事務局が新生活運動協会であり、さらに、厚生省と関係の深い日本児童問題調査会の会長を務めていたことから、こどもの国との関わりがあったのだろう。また久留島は、日本におけるボーイスカウトの普及に心血を注いだ人物でもあり、1954年には、ボーイスカウト日本連盟理事長に就任している。後述するように、久留島のこの経歴が後に重要な意味を持つことになる。

会談は、1961年3月15日、府中市浅間町の在日アメリカ軍司令部の司令官次室で行われ、幸いにもその時の記録が残されている。この会談は、田奈弾薬庫の返還にとってきわめて重要であり、かつ検討すべきさまざまな要素が含

まれているので、長文であるが資料的な意味も兼ねて以下全文を引用したい。

(久留島) 閣下にお目にかかれてたいへん光栄に思っています。閣下には軍務ご多忙のところ、わたくしのために時間をさいていただき、恐縮に存じます。わたくしは本日、日本ボーイスカウトの一員として、多数のボーイスカウトの要望を、あなたにお伝えし、ご配慮をお願いしたくてまいりました。

(バーンズ) 久留島さん、ご多忙のなかを、よく府中までおいで下さいました。歓迎します。ここにいる七人は、わたくしの上級幕僚です——といって、幕僚の一人ひとりを紹介——

お話の内容によっては、彼らを退席させてもよろしいが…。

(久留島) いや、みなさんにもお聞きいただいたほうがありがたい。さっそくですが、お願いの趣は、閣下にお目にかかるために秘書を通じてお話し申し上げた件です。

(バーンズ) クルップス准将から報告を受けています。こどものプレイグラウンドの件ですね。

(久留島) そのとおりです。日本政府は、こどもたちの健全育成のための、そのシンボルともなるべき施設の建設を計画しています。わたくしも日本ボーイスカウトの代表として、その計画に参画させていただいています。その施設は、日本政府としても、画期的な施設となるはずのもので、「子供の国」という名でよぶ予定にしています。

わたくしたちが、その施設の建設を予定している土地は、東京都と横浜市にまたがっていて、いま在日米軍が管理している田奈弾薬庫です。日本政府から、その返還をお願いしていますが、たいへん難しいとうかがっています。

しかし、ボーイスカウト日本連盟としても、なんとかして、あの地に立派な施設ができるように願っています。司令官閣下のご配慮をえたくてお願いにきています。

(バーンズ) 久留島さん、田奈の件は、日米施設委員会において、現在、その管理を解除する予定を持っていません。そのことは先般の委員会において、日本政府に回答したはずですが、それは、われわれとしても十分に検討したうえでの結論です。その点を理解していただきたい。

(久留島) 立地条件、その他を考えても、「田奈」以外の適地は見当たりません。そこが最適地です。こどもたちの健全育成のためのシンボルとなる施設をつくるため、ぜひ「田奈」の返還をお願いしたい。

(バーンズ) あなたからお申し出の、こどもたちのプレイグラウンドについては再検討を命じてあるが、残念ながら、この件はわたくしの一存では決定しかねることなのです。この機会に、プレイグラウンドの内容をお聞かせくださらないか。幕僚たちの検討にあたっての資料となるでしょう。

(久留島) 承知しました。その資料をもってきています。英文と日本文の両方がありますが、みなさんには日本文の資料をおわたししましょう。

(バーンズ) そうしてください。しかし、ほんとうに申し訳ないが、わたしの幕僚たちはたいへんな不勉強で、日本文の解説は不可能なようで…。——幕僚一同爆笑——

(久留島) では、閣下にだけは、日本文をおわたししましょう。——といって、実は英文の資料をわたした。その資料によって、十分ほど、施設の目的や計画を説明したのち——

(久留島) 東京周辺では、この計画を実現できる場所は「田奈」のほかにはないと考えています。いま在日米軍に提供されている池子弾薬庫や稲城基地、それに朝霞・根津パークなどは、それぞれ米軍の目的に沿って利用されていることを、わたくしも承知していますが、「田奈」は朝鮮動乱以後、弾薬の処理と保管以外には利用されていないときいています。ぜひとも閣下のご尽力をお願いします。

(バーンズ) 久留島さん、先ほども申し上げたとおり、これは、わたくし一人の権限で処理できることではありません。ハワイにあるアメリカ太平洋軍司令部と本国・国防省のセクションでの検討が必要なのです。アメリカとしては、極東アジア全体での戦略的な見地から「田奈」の価値を^(マ)検検討しなければならぬのです。もちろん在日アメリカ軍司令部のコメントも必要になりますが。

(久留島) 「子供の国」は、皇太子殿下の御結婚記念として計画されているものです。そのために、多くの国民からお祝いの寄付金がよせられています。

皇太子殿下は、その寄付金を子供たちの健全育成のために役立ててほしい、都会の子供たちには珍しい牧場やミルクプラントをつくって、その実物をみせてやりたいと希望しているのです。そのための適地は「田奈」のほかにはありません。ぜひ返還していただきたい。

(バーンズ) ——おどろいた表情で——久留島さん、「子供の国」の計画が皇太子殿下のご結婚に関する記念事業であることは、いま初めてうかがいました。これは、たいへん重要な問題であると認識しました。

——ここで、バーンズ中將はスパングレー大佐に対し、「田奈」の返還は皇太子殿下の御結婚記念事業にかかわるものである点について、日本政府から説明があったのか、そういう点を確認したのかと、言葉鋭く問いただした。スパングレー大佐が、日本側からはそのような発言はなかった、いま初めて久留島氏からきいた旨を答えると、バーンズ中將は情報収集の不備をはげしく叱責した。スパングレー大佐は起立し不動の姿勢でそれをきき、会談の空気は一挙に緊迫した。久留島氏はいそぎ、とりなしに入った——

(久留島) 閣下、日本政府の関係者は皇室にかかわることについては公表しないことが不文律になっています。政府のやることについて、皇室を前面にだすことは絶対にありえないことをご理解いただきたい。けっして閣下のスタッフに責任のあることではありません。

(バーンズ) 久留島さん、ありがとう。あなたのご配慮ある言葉に感謝します。

わたくし自身で、「田奈」について再度検討するよう幕僚に命じることにします。

日本には五月五日に「チルドレンズ・デー」(こどもの日)というのがあるが、それがあって国民がお祝いするそうですね。すばらしいことだ。アメリカにも、そういう日が欲しいと思います。

(久留島) ぜひ、そうあって欲しいと思います。わたくしのために長時間をさいていただいて、ありがとうございます。あなたの再検討の結果がすばらしいものであることを祈っています。

(バーンズ) 久留島さん、ぜひ、またお目にかかりましょう。

ところで、あなたは以前、カリフォルニアでひらかれたボーイスカウトのジャンボリーに来られたことがありますか。

(久留島) ずいぶん昔のことですが、四十人ほどのスカウトの代表をつれて参加したことがあります。多くのすばらしい思い出を持っています。立派なジャンボリーでした。

(バーンズ) 久留島さん、わたしもアメリカのボーイスカウトの代表の一人として、あのジャンボリーに参加していたのです。日本のテントに招待されて、そこで初めておコメのご飯をたべました。木の人形もいただきましたが、それはいまアメリカの自宅に残してあります。

(久留島) それは宮城県・鳴子の「コケシ」という木の人形です。わたしが友人にたのんでプレゼント用につくらせて持っていったもので、人形の底に日本文字で「日本ボーイスカウト」と書いてあるはずですが。——両手で示して——このていどの高さのコケシと記憶していますが、当時は船で十五日もかけて太平洋をわたり、サンフランシスコに着いたものです。はるばる海をわたったコケシです。

(バーンズ) では、あなたとわたしは二十五年まえにお目にかかり、きょう再会したということになりますね。けっして初めてお会いしたわけではないのですね。今夜、妻に報告しよう。おどろくでしょうね。

(久留島) これを機会に、こんどは日本のボーイスカウトのために閣下の講話をお願いしたいと思います。

(バーンズ) 時間があれば、いつでもやります。副官と連絡してください。ぜひ、またお目にかかりましょう。

久留島は、帰途の車中で「これで田奈は戻ってくるな…」とつぶやいたという。この会談の2週間後、1961年3月29日の日米合同委員会施設特別委員会の席で、米軍側より「5月5日をもって田奈弾薬庫を返還する」旨の回答があった。返還日の5月5日が、会談の中で話題となった「チルドレンズ・デー」に合わせた米軍側のはからいだった可能性もあるが、その詳細は不明である。

この会談で決定的に重要なのは、日本側が皇太子結婚という皇室の慶事を交渉の切り札として使ったことである。そしてこの天皇制との関わりと言及こそが返還の決定打となった。しかしここで一つの疑問が生じてくる。それは、「日本政府の関係者は皇室にかかわることについては公表しないことが不文律」であるのだとすれば、なぜこの交渉の場であえて皇太子結婚記念の話を持ち出したのか、ということである。

会談の冒頭で久留島は、「わたくしは本日、日本ボーイスカウトの一員として」とその立場を明確に打ち出している。形式的には、厚生大臣の諮問機関である中央児童福祉審議会・中央児童厚生施設特別委員会の委員長という公的な立場でありながら、実際にはボーイスカウト日本連盟の一員としてわたりあった。政府の代表者としての立場と民間人としての立場をうまく使い分けて利用した久留島のしたたかさがあったからこそ成し得たのではないか。

そして、皇室の話題を出したのは、おそらくは久留島にとって最後の手段であったに違いない。10分ほど資料をもとに説明した後、バーンズは「わたくし一人の権限で処理できることはありません」と返答する。これにより手詰まりとなった久留島は、その後のタイミングで皇太子結婚のことを切り出すのである。まさに窮余の策だったのだろう。

いずれにしても、皇室の事情を切り出したことによって、事態が大きく変転した。このことは、こどもの国が皇太子結婚記念という大義名分を持っていなければ実現できなかったことを示すだけでなく、米軍基地返還問題に天皇制の影響が深く関わっていたことを具体的に示す例証となるかもしれない。

ちなみに、ボーイスカウトの立場を強調することによって交渉を有利に導いた久留島の置き土産とも言うべきモニュメントが、現在もこどもの国に残されている。それは、「無名戦士の記念碑」といわれるもので、ボーイスカウトの美談を顕彰したレリーフと銅像からなっている。レリーフの脇にある由来板には、次のような要旨の説明が書いてある。

第二次大戦中の南洋群島での実話である。一人のアメリカ兵が重傷を負って倒れていたところへ、銃剣を手にした日本兵が立っていた。アメリカ兵は恐ろしさのあまり気を失ってしまったが、しばらくして意識が戻ると、傍らに小さな紙切れを発見した。そこには、「ほくがきみを刺そうとしたとき、きみは三指の札をした。ほくもスカウトだ。スカウトは兄弟だ。きみの傷には手当をしておいたよ。グッドラック」と書いてあった。帰還した兵士はその父にこの事を話し、やがてボーイスカウトアメリカ連盟の知るところとなった。



(写真5) 無名戦士の記念碑 (2009年1月撮影)

久留島が、この二人の兵士の記念碑を建てたいと、ボーイスカウトの富士野営で話をしたところ、為替を入れた手紙が自宅に続々と寄せられるようになり、久留島の手によってこどもの国に贈呈することになったという。その記念碑は、改修された弾薬庫の入口に設置してある (写真5)。

2 皇太子結婚という「磁力」

こどもの国と天皇制との関わりは、もちろんそれだけではない。むしろ、皇太子結婚という皇室の慶事から発せられる磁力は、多くの物、人、金をこどもの国という「夢の空間」に吸い寄せ、こどもの国のありようを決定するほどの影響力を持っていた。そもそも出発点が皇太子結婚のお祝い金問題にあるのは前述したとおりだが、ここで注目したいのは、企業、なかでも朝日新聞社と雪印乳業の利益を度外視した献身的ともいえるような援助、協力である。こどもの国建設にあたっては、その他の多くの企業が物的・金銭的支援を惜しまなかったが、この二社についてはその度合いが群を抜いていた。

(1) 「主催者」としての朝日新聞社の関与

皇太子の意向を汲んだ朝日新聞の記者・伊藤牧夫が、メディアによって広く社会に訴えかけたのがそもそものきっかけであったように、こどもの国(厚生省)と朝日新聞社は深い関わりを持ち続けた。朝日新聞社とのつながりの端緒について、当時、朝日新聞社と厚生省の橋渡し役をしていた寺田勤(当時朝日新聞厚生文化事業団主事)は次のように回想している(池田 1996: 19-20)。

宮内庁詰め記者として皇太子ご結婚の取材に活躍していた社会部の伊藤牧夫さんが、ある日、わたしを^(ママ)尋ねてきた。

伊藤さんがいうには、「皇太子殿下のご結婚をお祝いするにふさわしい記念事業を、朝日新聞が国民によびかけて、なにかやれないものか。(略)朝日新聞社が協力して、なにかもっと大きいことをやってみようか」と。

わたしは「それはいいことだ」と賛成し、さっそく先輩の衣奈多喜男企画部長に相談した。

衣奈さんも、「それは面白い。朝日新聞社として協力するにふさわしい大事業だ。それならオランダのハーグにあるマドゥローダムのような、「子供の国」がいい。いずれ皇太子さんにもお子さんが生まれることだろうから、そういうところにお子さんをつれて遊びにいられるのもよいことだ」とたいへんな張り切りようだった。

マドゥローダムというのはミニチュア版の王宮や古城や国会議事堂などがあり、それで子供たちはオランダの歴史や社会を一日で学ぶことができるという立派なものだ。衣奈さんは外国事情に詳しい人だったので、すぐこういう考えが出たのでしょう。その後、衣奈さんが朝日社内をまとめてくれた。

わたしは厚生省に知人が多いので、さっそく同省のみなさんと話し合った。

厚生省では、「それはいい話ですが、カネがかかる。まず朝日のほうで世論を盛り上げてくれないか」ということだった。社内でこの話しをすると、もちろん衣奈さんも伊藤さんも賛成だった。紙面でのキャンペーンは主として伊藤さんがやった。

こどもの国への着想の経緯について、先の大山の回想と食い違う部分もあるが、実際のところは厚生省と朝日新聞社との合作だったのだろう。いずれにせよ、出発の時点から両者の二人三脚で歩みを進めていたことは間違いない。

そして、建設計画を協議していた中央児童福祉審議会・中央児童厚生施設特別委員会のメンバーも、朝日新聞と厚生省で協議して人選し、朝日新聞社からは衣奈多喜男(企画部長)が加わることになったのである⁽⁹⁾。

その後、こどもの国の建設を実質的に担当するための「こどもの国建設推進委員会」(1961年11月24日設置)と、募金活動および寄付金受け入れを行うための「財団法人こどもの国建設協力会」(1962年8月28日設置)という二つの組織が作られるが、それらの組織の事務局は朝日新聞社内に置かれ、衣奈が二つの事務局長を兼ねることになる。こどもの国の建設は朝日新聞社がその裏方をすべて担っていた。

また、「こどもの国の歌」や「こどもの国の国旗」の募集に際しては、朝日新聞がそれぞれ懸賞募集の「社告」として掲載し、懸賞である高級カメラも朝日新聞社から贈られている(『朝日新聞』1962年3月10日・1963年1月28日)。さらに、紙面全面を使ってこどもの国の特集を組み、世界の類似する施設を取り上げ、実際に記者が現地取材に行つてその紀行文を寄せるなど⁽¹⁰⁾、こどもの国の準備状況について新聞紙上で逐次報告の記事を掲載し、会社が丸となって支援しているようすが窺える。

皇太子結婚という皇室慶事を盛り上げるために協力を惜しまない朝日新聞社の姿勢は、衣奈が認定した「朝日新聞社として協力するにふさわしい大事業」を成し遂げようとする意思に裏打ちされたものだったのだろう。厚生省から要請されたという「世論を盛り上げ」る役割も忠実に果たしていく。

つまり、朝日新聞社はジャーナリズムから要請されるべき批評者としての立場や姿勢を放棄し、むしろ「主催者」としての立場を堅守した。自ら建設推進のための広告塔となり、旗振り役に専念することによって、客観報道というジャーナリズムの原則から逸脱したことになる。新聞社が仕掛けて演出する、いわゆる「メディア・イベント」(吉見 1996: 4)の典型例ではあったが、朝日新聞社企画部長として1964年に「ミロのビーナス」の招聘に日本で初めて成功し、1965年にはエジプトのナセル大統領(当時)に直談判して「ツタンカーメン展」を実現させるなど(『朝日新聞』1988年6月22日)、文化事業に辣腕を振るっていた衣奈の力量に迫る部分が多かったのだろう。

さらに、先の久留島―バーンズ会談を仕組んだのも、実は朝日新聞社によるものだった可能性があるという。『こどもの国三十年史』を執筆した池田邦二によれば、この会談を誰が準備したのか「明らかではない」としながらも、久留島に同行していた山崎昌矩(当時厚生省養護課事務官)が、「厚生省がやれる立場にはなかったことは明らかである。おそらく朝日新聞社が、同社屋内に間借りしていたスターズ・アンド・ストライプス紙を通して米軍に根回ししたのではないかと証言しており、さらに、先の寺田勤(当時朝日新聞厚生文化事業団主事)は「米軍との折衝を

したのは朝日新聞企画部にいた二宮順氏である。かれは若いころアメリカに留学し、英語が達者で、しばしば米軍首脳と交渉していた。久留島バーンズ会談も、衣奈企画部長の指示をうけて、かれが準備したものにちがいない」と語っていることから、衣奈と二宮の合作であった可能性が高いとしている（池田 1996：63-64）。

池田はさらに、当時、朝日新聞社の企画部員であった志村武夫による、「二宮氏は得意の英語を駆使してしばしば米軍と折衝していた。かれは机をたたいて相手とやりあうというタイプだったので、それがかえって米軍の信用をえていたようだ」という証言を紹介しているが、いずれにしても、正式な手続きを経ていったんは「返還ノー」が突きつけられたにも関わらず、再度の交渉が可能だったのは、このような公式の政府間交渉とは別のルートからの工作があり、そこに朝日新聞社が深く関与していたと考えられる⁽¹¹⁾。

(2) 雪印こどもの国牧場の誕生

1961年12月22日、厚生省児童局長の黒木利克、こどもの国建設推進委員会事務局長の衣奈多喜男（朝日新聞社企画部長）、こどもの国のマスタープランの設計者・浅田孝の三人は、こどもの国の全体構想について皇太子に説明した。皇太子からは、「産業とこどもを結びつけるために牧場などを作っては——」という意見があり、そのやりとりが新聞で報道される（『朝日新聞』1961年12月23日）。この皇太子による牧場建設の提案にいち早く反応したのが、雪印乳業だった。

『こどもの国三十年史』によれば、記事が出た2日後の12月25日、雪印乳業の関係者が厚生省を訪れ、牧場建設に協力する用意のあることを申し入れたという（池田 1996：107）。一方、『雪印こどもの国牧場10年史』では、1961年12月26日夕刻に、厚生省から北海道庁を通じ雪印乳業に対して協力の要請があり、翌年1月4日にも厚生省から構想の説明があったとしている。さらに、当時雪印乳業酪農部にいた原田新介は、「最初、参議院の町村金吾代議士（元・北海道知事）から、佐藤社長、瀬尾副社長に、「こどもの国」^(ママ)建設計画のうち、北欧式の牧場建設の計画があるが、雪印として引き受けられてはどうか」という相談が持ちかけられた」と回想している（雪印こどもの国牧場社史編纂委員会 1976：53）。

いずれにしても、皇太子の発言を受け、数日のうちに水面下で複数の動きが錯綜していたようすが窺える。それだけこの発言が重要な意味を持ち、関係者の間で緊急の課題として直ちに着手すべきとの判断がなされたのだろう。雪印乳業では、皇太子の発言の5日後である12月27日に、社長の特命で「牧場建設プロジェクトチーム」が設けられ、さらに翌年1月24日には早くも厚生省、農林省、雪印乳業の三者が、現地を視察している（雪印こどもの国牧場社史編纂委員会 1976：49-50）。

一方、雪印乳業から数日遅れて、明治乳業も協力の方針を厚生省に申し入れており、翌2月21日に現地を視察している（池田 1996：111-114）。結局、雪印乳業と明治乳業から計画案の提出を求め、こどもの国建設推進委員会が審査することになった。計画案では、雪印乳業の方が予算規模も大きく、内容も詳細だった。特に、「牛乳科学普及の目的で、乳製品（バター・チーズ・練乳・粉乳・市乳・アイスクリーム）等を小型化したパノラマ式によって、稼働が一目でわかるような展示場を設置し、ほかに展望台・休憩室を設ける」「ミルクプラントの、実際の工程処理が見学できるようにする」（雪印こどもの国牧場社史編纂委員会 1976）という構想は委員の心をとらえ、その結果、雪印乳業に軍配が上がる。

このとき厚生省とこどもの国建設推進委員会から示された条件は、「主たる建物等、不動産については、国（法人発足後は当該法人）に寄付すること」「牧場経営により利益を生じたときは、原則として、「こどもの国」に還元する措置を講ずること」というものであった。雪印乳業では当時、この牧場経営によって毎年少なくとも500万円の赤字が出るのが試算されていた（雪印こどもの国牧場社史編纂委員会 1976）。しかし、雪印乳業はこの条件をのむ。そして実際に、雪印乳業の負担によって建設した牛舎・搾乳舎・たい肥舎・農機舎・サイロ・ミルクプラントの各牧場施設（7,426万円相当）および食堂（1,044万円



(写真6) 雪印こどもの国牧場（2009年1月撮影）

相当)は、国へ現物納付されている(池田 1996:227・374)。

こうして、不動産の寄付と利益の還元によって厳格に条件づけられた運営は、「雪印こどもの国牧場」として現在まで続けられている(写真6)。1958年11月に、過度経済力集中排除法によって分割していたクロバー乳業との念願の復活合併を果たし、積極経営を進めていた当時の雪印乳業の企業戦略とも同期するものだったとはいえ、皇太子発言を発端とすることには変わりなく、それが営利を伴わない社会貢献事業として維持する動機づけとして作用し続けているのである。

(3)日産自動車による交通訓練センター

こうした企業の惜しむことない協力は、朝日新聞社や雪印乳業にとどまらない。表1のように、こどもの国内の多くの施設が、寄付によって成り立っていた。その中でも、開園当初のこどもの国で最大の人気を呼んだ交通訓練センターは、日産自動車の全面協力で実現したものとして注目したい。しかもこの交通訓練センターでは、子どもに本物の自動車を実際に運転させるというものであった。

1961年6月5日に中央児童福祉審議会・中央児童厚生施設特別委員会は「こどもの国建設要綱」をまとめているが、その中で「主要計画施設」として「こども自動車道路とこども自動車学校を設置し、こどもが自動車を運転すること」と謳われていた(池田 1996:114)。その背景には、「第一次交通戦争」とよばれる、昭和30年代以降の自動車交通の急成長に伴う交通事故による死者数の急増があり、子どもに対する交通安全教育の必要性が叫ばれつつあった時代であった(金子 2008)。こどもの国の建設計画を取り上げた朝日新聞の「天声人語」欄においても、とりわけ子どもの交通訓練の場としての

(表1) こどもの国における各設備整備の資金源(社会福祉法人こどもの国協会 1980:31-32)

年度	寄付	国庫補助	自己資金
1962	牧場整地	管理事務所 白鳥湖	
1963	自然プール		
1964	牛舎・ミルクプラント 駐車場整地	交通訓練センター周遊コース 自由広場 中央広場	
1965	交通訓練センター 食堂 交通訓練コース セントラルロッジ 吊り橋 野外集会場 正面ゲート 牧柵整備	D地区プラント下便所 D地区児童遊園 正面ゲート 内周道路	
1966	林間学校メインホール・キャ ビン・浴場 ドラム缶橋 D地区管理棟 A地区児童遊園 一号井戸 スケートリンク 児童館 林間プール キャンプ場		
1967	キャンプ場下炊事場 グラウンド スケートリンク増設		
1968	ポニー牧場 安全遊具広場		
1969	皇太子記念館土地造成 ポニー牧舎 水洗便所(2ヶ所)		一号井戸徐鉄装置 皇太子記念館土地造成
1970	遊具広場		
1971	椿の森造成 ポニー馬場 付属庭園 第二グラウンド整地	皇太子記念館	ドラム缶橋架け替え
1972	少年サッカー場 クラブハウス	便所(2ヶ所) 水飲み(10基) 2号井戸高架水槽	
1973		白鳥湖改修	ポニー牧場展示室 白鳥湖売店 キャンプ場炊事炉改修
1974		高圧ケーブル改修 道路舗装	自転車乗り場舗装
1975	コンビネーション遊具	自由広場芝張 園内放送設備	球技広場 自転車コース改修
1976	広場休憩所 ローラーすべり台	芝張 内周道路舗装 入口・キャンプ場道路舗装 災害復旧工事	アンデルセン記念館改修
1977	ローラーすべり台 牧場牛舎等改築	プール・スケート場	
1978	サイクル列車 クレーター遊具 中央広場排水施設	外周道路消火栓 外周道路舗装	椿の森温室遊歩道
1979	福祉遊具 中央広場舗装 トリム広場	キャンプ場回収 キャンプ場グラウンド連絡橋 国際児童年記念園地	皇太子記念館 児童館改修 交通訓練センター改修 セントラルロッジ改修 プール・スケート場周辺舗 装
1980	フィールドゲーム 椿の森入口整備 自転車乗り場改修	自然研修センター	陸橋下休憩所改修
1981	スカイサイクル 時計塔 ポニー牧場牧柵改修 椿の森看板整備	入口周辺改修 電話設備改修 サービスセンターB棟 こどもの国表示板	サービスセンターC棟 サービスセンターA棟改修 正面陸橋塗装 クラブハウス塗装
1982	ローリングサイクル	水質測定装置 電気設備改修 便所(3ヶ所)	
1983		サイクリングコース改修 第2グラウンド改修	2号井戸改修 プールスケート場改修 第3変電所改修

役割を重視し、「こどものための交通教育は小学校でも“正科”とすべきだが、「こどもの国」にも模範的な交通実習所を造ってもらいたい」と期待を寄せていた（『朝日新聞』1962年1月8日）。このような社会情勢の中で計画に盛り込まれることになったと思われるが、この交通訓練センターの建設に際し、日産自動車は協力を惜しまなかった。

当初、日産自動車は、三越百貨店の展覧会に出品した子ども自動車の提供を申し出ていた。この子ども自動車とは、ペダルを踏むと電気で動く、遊園地やデパートの屋上で遊具として設置してあるいわゆるバッテリーカーのことだった。しかし、衣奈の交渉により、日産自動車は内燃機関を持つ小型車、つまり本物の自動車をこどもの国のために設計、製造して、提供することになったのだ。その経緯について、当時日産自動車の常務であった太田寿吉は後年次のように回想している（池田 1996：147-148）。

子供自動車については、当時の岩越忠恕副社長が担当しており、わたしはその下働きをやっていたにすぎない。岩越さんは明治生まれの人で皇室にたいする尊敬の念があつかった。「こどもの国」が皇太子ご夫妻のご成婚記念のためのものであり、かつ、次代をになう子供のための施設であるという社会福祉的な意義のあるものなので、日産自動車も協力しようということになった。

また、日産自動車は昭和八年に横浜市神奈川区宝町二番地、いまのJR新子安駅ちかくでスタートし、神奈川県内にいくつかの工場をもっている。したがって日産にとって、横浜は「発祥の地」であり、「地元」だという意識がある。この点からも協力することになった。

最終的には、当時の川又克二社長の判断で決定し、子供自動車百台を提供したと記憶している。

日産自動車が協力するに至った動機として、地元企業という自覚に加え、皇室慶事と社会福祉とが同列に並んでいたことが注目される。結果的に、当時市販されていた軽四輪自動車の中でもっとも排気量の小さい「コニーグッピー」をベースに、子どもの安全性を考慮した特別な改造を施すことになったが、100台もの特注車は日産自動車より寄贈され、さらに整備や部品の交換もすべて日産自動車が引き受けるという条件だったという（寺田 1985：17）。スピードに関しては、20km/hを超えると警報が鳴り、30km/hに達すると制御装置が作動するように工夫され、車の全周を軽量鋼製のバンパーで取り囲んだ（写真7）。

実車を運転できるとあって、開園以降、この交通訓練センターは人気の的であったが、日産自動車による特別設計車だったために交換部品が確保できず、1973年末には可動車が数台になってしまったという。そのため、1974年3月からは自動車に変わって自転車を走らせるようになり、現在も、もとの自動車コースはサイクリングコースとして利用されている（写真8）。



（写真7）交通訓練センターの自動車（池田 1996：150）



（写真8）改修された自動車コース（2009年1月撮影）

（4）「設計集団」の実験場

皇太子結婚という磁力に吸い寄せられたのは、企業だけではない。「設計集団」と呼ばれる専門家たちの存在とその働きも、重要な鍵を握っていた。こどもの国内の各種建築物などを設計するため、以下のような専門家たちが集まってきたのだ（肩書きは当時）（池田 1996：178-179）。

〔建築部門〕 浅田 孝（環境開発センター所長）

大高正人（日本建築家協会理事）

菊竹清訓（菊竹清訓建築設計事務所長）

- 黒川紀章（黒川紀章建築都市設計事務所長）
鈴木 彰（鈴木彰建築事務所長）
大谷幸夫（東京大学都市工学科助教授）
〔遊園部門〕 金子九郎（日本児童遊園協会理事）
〔造園部門〕 江山正美（東京農業大学教授）
〔彫刻部門〕 菊池一雄（東京芸術大学教授）
〔動物部門〕 林 寿郎（上野動物園園長）
葛 精一（農林省鳥獣実験場研究顧問）
〔その他〕 柳 宗理（柳工業デザイン研究会）
栗津 潔（武蔵野美術大学講師）
泉 真也（圭デザイン事務所）

この中で注目すべきは、建築部門の人選である。当時としては中堅クラスまたは新進の設計者として脚光を浴びていた人物が選出されているが、特に、1960年代に展開された「メタボリズム」とよばれる建築運動に関わった建築家を中心となって構成されていた。東京オリンピックを間近に控え、メタボリズムも最高潮を迎えていたこの時期にあって、まさにその運動の渦中にあった面々を取り揃えたことは特筆に値する。その背後には丹下健三の影響が色濃く感じられるが、おそらく、こどもの国のマスタープランを練り上げ、こどもの国建設推進委員会の委員にもなっていた浅田孝による人選だったのだろう。そして実際に、浅田は設計集団の責任者となっている。

この設計集団は、皇太子記念館（浅田孝）、林間学校（菊竹清訓）、交通訓練センター（鈴木彰）、セントラルロッジおよび野外集会場（黒川紀章）、アンデルセン記念の家（黒川紀章）、花びら休憩舎（黒川紀章＝高村光太郎賞）など、開園初期の中心的な建物を設計していく。

このほか、児童遊園と児童館、屋外スケート場は、ニューヨーク在住の彫刻家、イサム・ノグチが設計していた。ノグチは1965年8月に来日し、設計集団に特別参加したが、これは大谷幸夫の引きによるものと思われる（横浜美術館 2006）。滞在中の4ヶ月の間、ノグチはほとんどこの仕事にあて（『朝日新聞』1965年11月27日）、園内を裸足で歩き回っていた姿を当時の職員が記憶しているという（池田 1996:377）。朝日新聞の取材に対し、ノグチは「三十年来のわたしの設計の体験をすべて生かした。遊び場には自然を残し、自然を生かさなければならぬ。遊んでいて心のたかぶりをおぼえるようなそんな私の夢が、こどもの国のネライともびったり合ってでき上がった」と目を輝かせながら説明した（『朝日新聞』1965年11月27日）。ノグチの生前に実際に建設された児童遊園（プレイグラウンド）は世界に2ヶ所しかなく、そのうちのひとつがこどもの国だった⁽¹²⁾。また、このプレイグラウンドは、「遊びの活動をその場所の地形と合体させるというノグチのプレイグラウンド・デザインにおけるヴィジョンにもっとも近い形で実現していた」と高い評価を得ていたが（リッチラック 2006:11）、現在はほとんどが撤去され、「骨だけと言われても仕方がない」（中村 2006:110）状態になっている。

一方、設計集団が手がけた建物の中で異彩を放っているのは、浅田孝設計の皇太子記念館だろう。皇太子結婚を契機としているために、当初から計画の俎上に載っていたと思われるが、『こどもの国三十年史』によれば、皇太子記念館の構想がいつどのようにして浮かび上がったのかは「資料がなく明らかでない」という。1961年11月24日に浅田孝が作成したマスタープランの中には「集会場（三千人収容、喫茶室）」とあるだけで、皇太子にまつわる構想は含まれていなかったが、1962年4月28日作成の最初のPRパンフレットには、「皇太子御成婚記念集会場を建設する」とあり、これがもっとも古い記録とされている（池田 1996:265-266）。したがって、1962年1月から3月にかけての議論の中で、マスタープランの「集会場」の構想に、「皇太子御成婚」という要素が加わったことになる。

しかし、この皇太子記念館の建設は難航する。建設費は総額3億円と見積もられていたが、国からの補助5,000万円を除く2億5,000万円は民間寄付によって調達しなければならなかったからだ。結局、資金難のため着工が遅れに遅れ、完成したのは開園後の1972年3月のことだった。地下1階に貴賓室と会議室、1階に舞台と客席382席、2階に音響室などのコントロールルームをもつ、屋根が特徴的な建物だった。

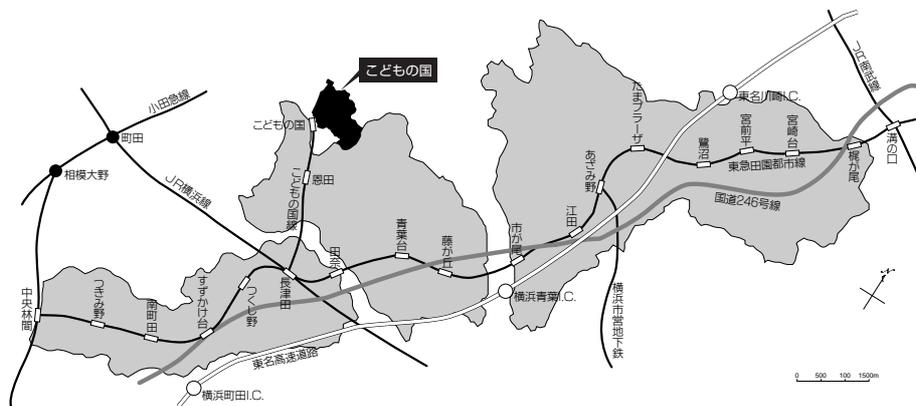
ところが、「設計集団」が設計したこれらの建築物は、自らの作品づくりの実験場と化した。すなわち、メタボリ

ズムの他の建築物と同様に、外観の芸術性の反面、実用に堪えないものとなり、なかには数年で使われなくなったり、取り壊されたりする建物も出てきたのだ⁽¹³⁾。夢の空間を演出すべく集められた若き有能な建築家たちは、その夢を膨らませ、自由に設計し過ぎたがゆえに暴走する結果になったといえよう。

3 「聖域」としてのこどもの国

(1) 東急電鉄による多摩田園都市構想

こどもの国が立地するエリアは、東急が推進する多摩田園都市構想の中に組み込まれていた。多摩田園都市とは、神奈川県北東部の丘陵地帯に開発総面積5,000万㎡の人工都市を出現させるという、民間事業としては日本最大規模のニュータウンであり、現在の東急田園都市線梶が谷駅から中央林間駅間の沿線約20kmに相当する(図1)。



(図1) 多摩田園都市開発図(東京急行電鉄田園都市事業部 1988)

多摩田園都市構想は、東急電鉄会長の五島慶太が公職追放後の1953年に発表した「城西南地区開発趣意書」に端を発し、1956年の「城西南地区都市計画の基本構想」によって計画が具体化されるが、すでにその時点で、田奈弾薬庫が計画区域に含まれていた。皇太子婚約が1958年のことであるから、こどもの国の構想が誕生する前から、東急電鉄が都市開発の目的でこの地に目をつけていたことになる。

事実、東急電鉄では、1957年に田奈弾薬庫と付属引き込み線の接收解除を申請している(東京急行電鉄社史編纂事務局 1973:614)。この付属引き込み線とは、陸軍田奈部隊が弾薬類の輸送・搬出のため、国鉄横浜線の長津田駅から田奈弾薬庫の間に1942年に敷設した鉄道を米軍が接收していたもので、その一部は現在のこどもの国線として利用されている。米軍は、輸送をトラックに頼っていたため、この鉄道引き込み線をほとんど使うことがなく、放置されたままとなっていた。東急電鉄は、田奈弾薬庫とともにこの使われなくなった路線もあわせて狙っていたのだが、当然のことながら接收解除が得られず、計画は実現しなかった。さらに、1960年と1962年にも同様に払い下げを申請しているが、やはり見送られている(東京急行電鉄社史編纂事務局 1973:614・東京急行電鉄田園都市事業部 1988:305)。

こどもの国の建設が軌道に乗りつつあった1964年には、東急電鉄はディーゼル気動車による引き込み線の運用計画を立てているが、それは、「こどもの国の建設費一部負担を条件とする引込み線用地の払下げという情報が、朝日新聞社を通してもたらされた」からだという(東京急行電鉄田園都市事業部 1988:305)。しかしこれも実現することはなかった。

このように東急電鉄では、多摩田園都市の開発計画の中に田奈弾薬庫を位置づけ、さらにその引き込み線の運行に関しても積極的な姿勢をみせていた。1956年に川崎市宮前地区の土地買収を開始して以来、すでに開発区域内の土地のとりまとめを進めていた東急では、同年に新玉川線(渋谷～二子玉川園間)および大井町線(溝の口～長津田間)の地方鉄道敷設免許を申請し、溝の口～長津田間はさらに翌1957年に距離を延長して溝の口～中央林間間の免許に変更申請している。つまり、東急がこどもの国線の運行に意欲的だったのは、多摩田園都市の計画が着実に進み、特に、渋谷から長津田を経由して中央林間へ至る東急田園都市線の建設が相当に進行していたからだった。

しかし、東急による引き込み線払い下げの計画は失敗を重ねていたため、1965年にこどもの国は鉄道アクセスがないままに開園する。開園当時、こどもの国への交通は、国鉄横浜線長津田駅から小田急線柿生駅からのバス便に頼るしかなく、特に休日の混雑は目に余る状態となっていた。鉄道による大量輸送手段の設置を求める要望の高まりに後

押しされる形で、その後、こどもの国線の建設が徐々に現実のものとなっていく。

1967年2月27日、特殊法人こどもの国協会と東急電鉄は覚書を締結し、①こどもの国の入園者に利用させることを目的とすること、②鉄道線の建設は東急電鉄が行うこと、③鉄道の敷設免許は特殊法人こどもの国協会が申請取得すること、④建設工事は、こどもの国協会の委託により、東急電鉄が設計施工すること、⑤鉄道線は、こどもの国協会が東急電鉄に貸与すること、という内容で合意した。

この覚書をもとに、鉄道賃貸借契約が取り交わされ、①鉄道線が利益を生ずるまでは、東急に対する使用料を無償とする、②もし欠損が生じててもこどもの国協会には負担させない、③利益を生じたときは両方で配分する、④鉄道線・付帯設備の維持修繕は東急電鉄が行う、という内容の条項が組み入れられた（東京急行電鉄田園都市事業部 1988：305-306）。つまり、損失が生じたら東急が穴埋めをし、利益が出たら両方で配分することになったのである。

このような取り決めによって、こどもの国協会は1967年3月23日に鉄道敷設免許を取得し、4月7日に工事施行認可を取得してから、東急電鉄ではただちに引き込み線の改修工事に取りかかった。既設線路の改良工事だったために工期は1ヶ月もかからず、免許取得からわずか1ヶ月後の1967年4月28日に開通するのである。

こどもの国線は、社会福祉法人（1981年までは特殊法人）こどもの国協会が施設を保有し、東急電鉄に運転管理を委託する形で運営するという、変則的な方法が採用されたために、さまざまな制約がついた。そもそもこどもの国線は「こどもの国の入園者のため」に敷設された純粋なアクセス路線という名目であり、なおかつ特殊法人・社会福祉法人の趣旨からも逸脱しない性格が求められたために、入園者以外の乗客の開拓が制限されていた⁽¹⁴⁾。仮に周辺の宅地化が進み、収益の上がる通勤線としての活用が期待されたとしても、この前提がある限りは通勤線への転身を図ることは不可能であった⁽¹⁵⁾。この状況について、当時、東急でこどもの国との交渉窓口となっていた田中勇は、

あの鉄道は、こどもの国にくるお客を乗せるのが目的であって、一般のお客を乗せるものではないということになった。

一般客を乗せないということなら、この鉄道は永久に赤字だと思った。しかし、日本の将来をになう子供たちのためだし、当時の五島昇社長も、世の中のことにはできるだけ協力しようという考えだったので、東急としても赤字覚悟で協力することになった。

と回想している（池田 1996：295）。

都市計画上の必要性からこどもの国に接近した東急も、こどもの国という皇太子結婚の磁場に引き寄せられた結果、次第に当初の思惑から逸れていった過程が見てとれる。こうして東急電鉄は、こどもの国の運営を側面から支える支援者としての立場をより明確なものにしていくのである。

(2) 「緑の孤島」と皇太子の「身体」

東急による多摩田園都市構想は着実に進行し、東急田園都市線の地下鉄半蔵門線の乗り入れ（1982年）や中央林間までの延伸（1984年）、横浜線の複線化完了（1988年）などにより、多摩田園都市一帯が東京都心と短時間で結ばれるようになると、こどもの国周辺の様相は一変した。

1955年の時点で2万人足らずだった多摩田園都市の人口は、30年後の1985年に40万人に膨張する。周辺は軒並み宅地化されるが、こどもの国の園内だけは開発を免れたことから、こどもの国の自然は残され、いつしか「緑の孤島」と形容されるようになっていた（神奈川県高校地理部会 1989）。

この現象は、皇居を筆頭に、明治神宮、新宿御苑、赤坂御所、浜離宮庭園など、東京の都心部にあって天皇や皇室とつながりのある自然が守られてきたことを想起させる。中島（1999：53-54）は、このことを「灰色の都市の海に浮かぶ「みどりの島々」と呼び、これらの「島々」が「神」の場を冒してはならないというタブーと自然保護とを結びつけ」る論理によって守られてきたことを指摘している。

天皇や皇室とかかわりのある「みどり」が「冒しがたい聖域」として残され、それ以外がいとたやすく開発された結果、都市にぽっかりと浮かぶ「みどりの島々」ができあがったというプロセスは、こどもの国が「緑の孤島」となったこととも重なり合う。1965年5月5日の開園記念式典で、皇太子の「おことば」として、「日本には、せまいながらも、

わたくしどもの祖先から、ながい間、したしんできた、豊かで美しい自然があります」「この新しくできた「こどもの国」には、豊かな自然があります」（池田 1996：210-211）と、「豊かで美しい自然」というメッセージを繰り返し発するとき、その「聖域」としての意味はますます強化され、さらに皇太子の記念植樹によって可視化される。

中島が仔細に検証した「明治の森」や「県民の森」のごとく、1960年代以降に生み出されてきた各種の「森」が、「天皇と皇太子が自らの聖なる刻印を刻み付けてゆく場所」（中島 1999：69）となっていったのと同じように、こどもの国の自然も、皇太子の「聖なる刻印」によって厳格に守られてきたのである。

しかしこどもの国の場合、米軍基地というもう一つの「冒しがたい聖域」も伏在していた。陸軍弾薬製造貯蔵施設を米軍が接収して田奈弾薬庫となった後、長らくそこは誰も手出しができない「聖域」として機能してきた。山と谷が入り組んだ「谷戸」とよばれる地形が、弾薬の貯蔵に適していたために改変されることなくそのまま残され、それがこどもの国の有効な資源として生かされたことは、皇室の「みどり」が残される前提条件が米軍によって用意されていたことを示している。逆にいえば、米軍の権威から奪還した「みどり」は、その後、米軍に代わって皇室の権威によって同じように守られてきたのである。

地元の人々は、こどもの国を皇太子からの「最上の贈り物」（『続・田奈の郷土誌』編集委員会 1966：28）ととらえた。こどもの国が紹介されるときには、常に枕詞のように皇太子の関連が言及され、こどもの国の自然は皇太子の存在と密接不可分のものとして受け止められてきた。つまり、こどもの国の自然と皇太子は一体化し、あたかも皇太子の「身体」の一部を構成するものとして地元の人々や当事者たちの中に埋め込まれていったのではないのか。

したがって、もしその「身体」に何らかの変調をきたすようなことがあれば、当然、何をおいてもその対処に全力を尽くすことになる。実は1980年代にいたって、このことを裏づけるかのような事態が巻き起こっている。

こどもの国が開園20周年を迎える頃、周辺の植生の減少の影響を受け、園内の動植物は減り、園内の緑の保存が危ぶまれるようになっていた。それまで園内で確認されていたムササビは1983年に、ヒクイナは1978年ごろにそれぞれ姿を消し、1965年に300匹が放し飼いにされたシマリスは10年後に全滅、同じく開園時に300羽ほど放鳥されたキジも50羽ほどに激減したという（『朝日新聞（夕刊）』1984年8月3日）。「緑の孤島」は、文字通りの「孤島」ではなく、周囲の影響を受け侵食される存在になっていたのだ。

このままでは「緑の遊園は永久に取り戻せなくなってしまう」（『朝日新聞（夕刊）』1984年8月2日）と危機感を強めたこどもの国では、朝日新聞社を動員して、緑化のための募金のキャンペーンを大々的に展開する。朝日新聞では、社告として募金活動をアピールするとともに、1,000万円を寄付した（『朝日新聞（夕刊）』1984年8月2日）。さらに、同月30日にも同じ社告を再度載せるといふ念の入れよう、同旨の社告を2回掲載するのは、朝日新聞社にとっても異例のことだったという（池田 1996：342）。

社告と併行して、「守ろう緑 こどもの国」と題した連載も開始する。「こどもの国」をはぐくんで来た丘陵の緑の帯は、この二十年間でズタズタに引き裂かれてしまった。「帯」は、次第に「点」になった。最後まで残った大きな点のひとつだった「こどもの国」周辺も、聖域ではなかった。全国一の人口急増地帯といわれる横浜市緑区の真ただ中であつたことが、悲劇の始まりだったかも知れない」と、奇しくも「聖域」という言葉を使いながらその窮状を憂えた。

これらの新聞キャンペーンが功を奏し、最終的に、実に1億3,000万円を超える寄付金が寄せられ、こどもの国では、これを原資に緑化に取り組んだ。園内の植生調査を依頼した横浜国立大学教授の宮脇昭のグループから、園の外周部にシラカシなどの高木を植えて「緑のシャッター」を張り巡らすという提言を受け、シラカシ、アカカシ約480本をはじめ、計13,300本の植樹を行った（池田 1996：346）。

この一連の経緯は、「皇太子からの贈り物」である自然が蝕まれているという事態に直面した時に生じた、一種の顕著な防衛反応だったことを示している。そして、大規模に展開されたこの緑化運動は、開園20周年にシンクロするものだったとはいえ、比喩的にいえば、皇太子の身体が切り裂かれるかのような当事者たちの痛みによって突き動かされていたのではないのか。あるいは、失われつつあつた皇太子とのつながりを再接続させるための営みだったといえるかもしれない。

おわりに

中島（1999：56）は、「現代日本における人間—自然関係と象徴天皇制との奇妙な結びつき」について、次のような示唆に富む指摘をしている。

現代日本のメディアにおいて「天皇制とは何か」とか「天皇とは何者なのか」ということはほとんど問われることがない。代わりに植物学者の昭和天皇の姿や自然に親しむ皇室一家、各種のイベントで自然保護をうったえる皇太子の姿などばかりが強調されている。あるいはいつの間にか国民の祝日となった「みどりの日」の制定のように、天皇や皇室と自然とのつながりを連想させる事柄は数多い。戦後の象徴天皇制のもとで天皇が非政治的でニュートラルな存在になればなるほど、天皇は「自然」と結びつけて語られてきたのである。

現代社会において、「自然」や「みどり」は、あたかも無色透明で価値中立的あるかのようにみなされ、語られる。「みどり」は、「左翼であれ右翼であれ、あるいは革新であれ保守であれ、すべての人々がそれを認め、そして受け入れる」（中島 1999：55）という特性を持ち、レクリエーションの場として「非政治的でニュートラルな存在」であるがゆえに、同じく脱政治化し、非政治的でニュートラルな存在になりつつあった戦後の象徴天皇制とはきわめて親和的であったのだ。

このような構造は、「みどり」についてだけではなく、実は「子ども」を語る時にも同じように立ち現れる。「子どもの健やかな発達」に疑義をはさむ人はきわめて稀であろうし、「子どもの夢」をあからさまに否定する人はおそらくどこにもいない。「子どもの夢」は、「みどり」と同じように、すべての人が善きこととしてあまねく受け入れるものであり、仮に立場や利害関係が違った場面があったとしても、「将来を担う子どものために」という名目がつけば、その点においてのみ同じ方向を向くことができる。

「子どもの夢」は、無色透明で非政治的な対象として認識される性質があるがゆえに、「みどり」と同じく、脱政治化した象徴天皇制のあり方と結びつきやすかった。児童図書の普及に尽力し、児童福祉施設の視察を精力的にこなしていた皇太子妃の姿が庶民の心をとらえたのも、こうした結びつきの端的なありようである。

一方、皇太子夫婦による「子供のための施設」が出発点となっている子どもの国も、まさに「子どもの夢」と天皇制とが表裏をなしていた。こどもの国は、さまざまな立場の集団や個人によって演じられた、いわば「子どもの夢」を実現する舞台としてとらえることができるが、そこに象徴天皇制が介在していたことは当事者にとってもごく自然なことであった。

それぞれ三者三様の背景からこどもの国に接近した雪印乳業、日産自動車、東急電鉄のいずれも、皇太子結婚を祝うため、そして「子どもの夢」の実現のために、利益を度外視した事業にあえて参入した。とりわけ日産自動車がこどもの国に全面的に協力するにあたって、「皇太子ご夫妻のご成婚記念のためのものであり、かつ、次代をになう子供のための施設であるという社会福祉的な意義のあるものなので、日産自動車も協力しようということになった」と述べ、その動機として皇太子の結婚と社会福祉を同列に並べていたのも、両者が矛盾することなく併存していたことを言い表している。

ただし、このことだけをとりえて、こどもの国が、象徴天皇制を正当化し国民の文化統合を促す装置として機能したと断じることは、いささか拙速に過ぎるだろう。こどもの国は、ある統一的な意思によって、あたかもジグソーパズルのピースがはめこまれていくように整然と組み立てられたのではなく、さまざまな背景を持つ複数の主体が皇太子の結婚を祝うため、「子どもの夢」を実現するために独自の価値判断で接近し、その時代状況や立地条件にも影響されながら、結果的にそれらの集合体として成立した空間である。したがって、まずこのような空間が成立するにいたった各主体の意図や相互の関係性について検討を加えていく必要がある。

このことを本稿では「象徴天皇制の磁場」ととらえ、さまざまな主体がそれぞれ固有の意思によって引きつけられていったプロセスを考察してきたが、その空間がいかなる意味と価値に支えられて形成されていったのか、具体的な相貌を描き出しながらさらに読み解いていくことが必要だろう。このことは、現代における象徴天皇制のあり方を考える際の重要な手がかりにもなるはずだ。

象徴天皇制と結びつきながら生まれた空間は、全国各地にある。とりわけ、「皇太子御成婚」というナショナルイ

ベントによって生み出されたこどもの国と類似するものとしては、明治百年を記念した「国営武蔵丘陵森林公園」（埼玉県比企郡滑川町・熊谷市／1974年開園）や、昭和天皇在位50周年を記念した「国営昭和記念公園」（東京都立川市・昭島市／1983年開園）などがある。2005年には、国営昭和記念公園内に「昭和天皇のご聖徳をたたえそのお人柄をお偲びするとともに、後世にそのご事績を伝えつぐ」⁽¹⁶⁾ことを目的として昭和天皇記念館が設立され、また一つ、新たな「聖なる刻印」が生まれた。こうした天皇や皇室の「聖なる刻印」によって意味づけられた空間の象徴性を読み解いていくために、これらの空間が今後、象徴天皇制との距離をどのようにとりながら、その姿を変えていくのかということについても同時に注視していく必要があるだろう。

注

- (1) 表2のように、全国各地に地名を冠した「こどもの国」と称する施設は存在するが、本稿で対象としているこどもの国は、地名が冠されない。「横浜こどもの国」や「中央こどもの国」「国立こどもの国」などよばれることもあるが、正式名称は単なる「こどもの国」である。このこどもの国をモデルにして、「地方こどもの国」と呼ばれる各県版のこどもの国が自治体によって設置されている。
- (2) 児童福祉法第40条に基づく児童厚生施設は、表3のとおりである。
- (3) 三田（1998）によれば、現在の園内には19基の弾薬庫跡が確認でき、ほかにも給水所跡、高射砲陣地跡、分駐所跡などを見ることができるといふ。そのほか、神奈川県歴史教育者協議会（1996）にも戦争遺跡の見学コースとして取り上げられている。
- (4) こどもの国の通史についてもっとも詳しく論じられているのは、『こどもの国三十年史』であり、内部文書や関係者の証言などを多用しながら詳細にまとめられている。本稿も同書の記載に依拠している部分が多い。
- (5) この時点では「子供」という漢字表記であったが、1961年8月9日に中央児童福祉審議会・中央児童厚生施設特別委員会が決定した「こどもの国建設要綱」において正式

(表2) 全国の「こどもの国」

名称	所在地	開園年	設置
北海道子ども国	北海道砂川市	1974	北海道
八戸公園こどもの国	青森県八戸市	1981	八戸市
佐野市こどもの国	栃木県佐野市	2000	佐野市
ぐんまこどもの国	群馬県太田市	1991	群馬県
千葉県こどもの国→千葉こどもの国キッズダム(2007/2/8～)	千葉県市原市	1971	千葉県
戸田市こどもの国	埼玉県戸田市	1973	戸田市
こどもの国	神奈川県横浜市青葉区・東京都町田市	1965	厚生省
山梨県立愛宕山こどもの国	山梨県甲府市	1971	山梨県
敦賀市こどもの国	福井県敦賀市	1980	敦賀市
静岡県富士山こどもの国	静岡県富士市	1999	静岡県
愛知こどもの国	愛知県幡豆郡幡豆町	1974	愛知県
海南こどもの国	愛知県弥富市	1985	愛知県
岐阜県こどもの国	岐阜県養老郡養老町	1979	岐阜県
滋賀県立びわ湖こどもの国	滋賀県高島市	1992	滋賀県
府中市こどもの国	広島県府中市	1993	府中市
鳥取県立鳥取砂丘こどもの国	鳥取県鳥取市	1973	鳥取県
さぬきこどもの国	香川県高松市	1995	香川県
西条市こどもの国	愛媛県西条市	1985	西条市
沖縄こどもの国	沖縄県沖縄市	1972	沖縄県

(表3) 児童福祉法第40条に基づく児童厚生施設の概要（内閣府 2002）

名称	機能等
小型児童館	小地域を対象として、児童に健全な遊びの場を与え、その健康を増進し、情操を豊かにするとともに、母親クラブ、子ども会等の地域組織活動の育成助長を図る機能
児童センター	①小型児童館の機能 ②運動を主とする遊びを通じた指導によって、体力増進を図る機能
大型児童館（A型児童館）	①児童センターの機能 ②都道府県内の小型児童館、児童センター及びその他の児童館の指導及び連絡調整等を行う中核的機能
大型児童館（B型児童館）	①小型児童館の機能 ②自然の中で児童を宿泊させ、野外活動が行える機能
大型児童館（C型児童館）	①広域を対象として、児童に健全な遊びを与え、児童の健康を増進し、又は情操を豊かにする等の機能 ②多様な児童のニーズに総合的に対応し、芸術、体育、科学等の総合的な活動ができる機能
その他の児童館	小型児童館に準ずる
児童遊園	都市公園との相互補完的な機能 主として繁華街、小住宅密集地域、小工場集合地域等遊び場に恵まれない地域に設けられるもの
こどもの国	児童の健全育成のための総合的な児童厚生施設として、緑豊かな自然と変化に富んだ起伏をいかし、児童の健康の増進と情操を豊かにする機能
国立総合児童センター「こどもの城」	児童の健全育成のための屋内型総合施設としての機能

- に「こどもの国」とひらがな表記が採用された。その理由として、①「供」はひらがな表記のふさわしい接尾語であり字面も堅い、②「こどもの国」とすれば、国民の祝日である「こどもの日」とも調和がとれる、③宮崎市にある「こどものくに」(現「青島リゾートこどものくに」、1939年開園)はすべてひらがな表記であるため、「国」を漢字にすれば競合しない、などの理由によるという(池田 1996: 86)。
- (6) 中央児童福祉審議会・中央児童厚生施設特別委員会の委員は以下のとおりである(池田 1996: 17-18)。相沢次郎(日本児童文化研究所理事長)、浅田孝(国際デザイン会議事務局長・環境開発センター社長)、井下清(日本児童遊園協会会長・東京農大教授)、井深大(ソニー社長)、衣奈多喜男(児童文学者)、大山正(厚生省児童局長)、海後宗臣(教育学者・東京大学教授)、木下正一(賛育会病院長・国立女子大教授)、久留島秀三郎(同和鉱業社長・日本児童問題調査会会長)、佐藤昌(都市計画協会常務理事)、千家哲磨(国立公園協会会長)、田辺繁子(専修大学教授)、円谷英二(東宝映画監督)、波多野勤子(評論家)、林寿郎(多摩動物公園管理事務所長)、星野愷(東京工業大学教授)、前川国雄(前川建設設計事務所長)、三島通要(ボーイスカウト日本連盟総長)、山下俊郎(児童心理学者・東京都立大学教授)
- (7) 横浜市内の接収面積は最大で1,200haに及び、112の施設が米軍に接収されていた(横浜市都市経営局基地対策部基地対策課 2008)。
- (8) 以下、米軍田奈弾薬庫返還に関する記述は、久留島一バーズ会談の記録も含め、池田(1996)に拠る。
- (9) ただし、表向きは衣奈の肩書きは「児童文学者」となっている(注6参照)。これは、朝日色を出さないための配慮であったという(池田 1996: 24)。
- (10) 1962年1月1日付の『朝日新聞』では、「ヨーロッパの「こどもの国」と題して、記者が実際にローマ、ロンドン、パリ、ハンブルグ、ハーグ、アムステルダムにある類似施設を訪れ、レポートしている。さらに同年1月11日にも、続編としてウィーン、チューリッヒの紹介をしている。
- (11) こどもの国マスタープランの設計者・浅田孝は、田奈弾薬庫の返還について「事務手続きとは別に私なりに、かねて師事していた松本重治先生にお願いして、御友人のラスク国務長官へ協力して下さる様親書を出していただくなどしました」と証言しているが(浅田 1980: 13)、このようなルートからの工作も影響していた可能性もある。
- (12) もう1ヶ所はアメリカのアトランタにあるハイ・ミュージアムに隣接する区域にある「プレイスケープス」である(リッチラック 2006: 11)。
- (13) たとえば、黒川紀章設計のセントラルロッジは、子どもたちの宿泊用として建設され、定員90人の宿泊室のほか、集会室、浴室、トイレ、食堂などが配置されていたが、2階の宿泊室からの避難設備が不備のため消防署と保健所との了承が得られなかったため、実際に宿泊施設として利用されることはほとんどなかったという。実際には、倉庫や職員の臨時の宿泊所として利用されるのみであり、1988年に解体されている。また、菊竹清訓設計の林間学校は、80人収容の宿泊室を備えたメインホールや、4棟のキャビン、展望台、総合グラウンド、林間プールなどからなる施設で、このうち4棟のキャビンは円柱の上に菱形の宿泊室が乗っているようなユニークな構造だったが、この宿泊室は、円柱内の垂直の螺旋階段を昇降しなければ出入りができず、窓もはめ込み式だったために夏は蒸し暑く、ユニークな構造ゆえに実用上の欠陥があった。そのため数年にして利用されなくなったという(池田 1996: 376-385)。
- (14) そのため、運転時間帯はこどもの国の開園時間に合わせて始発が8時台、終電も18時台であり、こどもの国の休園日である毎週月曜日には「休園日ダイヤ」という毎時1本運転のダイヤとなっていた。
- (15) 結局、通勤線化が実現したのは、社会福祉法人こどもの国協会が第三種鉄道事業免許を横浜高速鉄道に譲渡した1997年のことである。
- (16) 昭和天皇記念館を運営する財団法人昭和聖徳記念財団の「平成19年度事業報告書」より(オンライン) http://www.f-showa.or.jp/1_gaiyo/4_houkoku.html (2009年3月1日)

参考文献

- 浅田孝 1980 「マスター・プランの頃」『こどもの国20年のあゆみ』
- 池田邦二 1996 『こどもの国三十年史』 社会福祉法人こどもの国協会
- 衣奈多喜男 1980 「開園前夜のメモから」『こどもの国20年のあゆみ』
- 大山正 1980 「建設当初の経緯と民営移管前後」『こどもの国20年のあゆみ』
- 神奈川県高校地理部会 1989 『かながわの川 上』 神奈川新聞社
- 神奈川県歴史教育者協議会 1996 『神奈川県の戦争遺跡』 大月書店
- 金子 淳 2008 「交通戦争の残影 交通公園の誕生と普及をめぐる」『静岡大学生涯学習教育研究』 10
- 川又友三郎 1964 「中央児童厚生施設「こどもの国」子どものための教育施設」『社会教育』 19 (1) 全日本社会教育連合会
- 社会福祉法人こどもの国協会 1980 『こどもの国20年のあゆみ』
- 鈴木 猛 1963 「こどもの国」『新都市』 17 (3) 都市計画協会
- 「続・田奈の郷土誌」編集委員会 1966 『続・田奈の郷土誌』

- 「田奈の郷土誌」編集委員会 1964 『田奈の郷土誌』
- 寺田勤 1980 「皇太子ご一家とこどもの国」『こどもの国20年のあゆみ』
- 東京急行電鉄社史編纂事務局 1973 『東京急行電鉄50年史』 東京急行電鉄社史編纂委員会
- 東京急行電鉄田園都市事業部 1988 『多摩田園都市 開発35年の記録』 東京急行電鉄株式会社
- 内閣府 2002 『平成14年度版青少年白書 青少年の現状と施策』 財務省印刷局
- 中島弘二 1999 「「天皇の森」から「県民の森」へ 1960～1970年代の国土緑化運動における「自然」と「ネーション」」『金沢大学文学部地理学報告』9
- 中村尚明 2006 「イリュージョンの彫刻家イサム・ノグチ」『イサム・ノグチ 世界とつながる彫刻展』 横浜美術館
- 伴典次郎 1964 「中央児童厚生施設「こどもの国」」『造園雑誌』27(2) 社団法人日本造園学会
- 三田登美子 1998 「こどもの国 東京陸軍兵器補給廠田奈部隊・同墳墓所」『神奈川の中の朝鮮』明石書店
- 矢野朝水 1981 「こどもの国の民営化」『時の法令』1103 法令普及会
- 雪印こどもの国牧場社史編纂委員会 1976 『雪印こどもの国牧場十年史』 雪印こどもの国牧場
- 雪印こどもの国牧場社史編纂委員会 1995 『雪印こどもの国牧場 年表に見る30年の歩み』 雪印こどもの国牧場
- 横浜市都市経営局基地対策部基地対策課 2008 『横浜市と米軍基地 市内米軍施設の返還と跡地利用の推進』 横浜市
- 横浜美術館・「イサム・ノグチ 世界とつながる彫刻展」実行委員会 2006 『イサム・ノグチ 世界とつながる彫刻展』 横浜美術館
- 吉見俊哉 1996 「メディア・イベント概念の諸相」 津金澤聰廣『近代日本のメディア・イベント』 同文館出版
- ポニー・リッチラック 2006 「公園とプレイグラウンドをめぐって揺れ動く意志 イサム・ノグチのランドスケープ・デザイン」『イサム・ノグチ 世界とつながる彫刻展』 横浜美術館